

第85回全国都市問題会議報告書

令和5年10月19日

貝塚市議会議員 南野 敬介 殿

自由市民 食野 雅由
田畑 庄司
出原 秀昭

[開催概要]

主催 全国市長会、(公財)後藤・安田記念東京都市研究所
(公財)日本都市センター 八戸市
協賛 (公財)全国市長会館
開催期日 第1日 10月12日(木)
第2日 10月13日(金)
会場 八戸市公会堂・公会堂文化ホール
テーマ 文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展

第1日 9:30 開会式
9:50 基調講演 東京藝術大学長・アーティスト 日比野克彦氏
11:00 主報告 青森県八戸市長 熊谷 雄一氏
12:10 (昼食)
13:30 一般報告 文化事業ディレクター、演出家 吉川 由美氏
14:30 (休憩)
14:50 一般報告 長野県東御市長 花岡 利夫氏
15:50 一般報告 (株)鹿島アントラーズFC取締役副社長 鈴木 秀樹氏
17:00 (終了)

第2日 9:30 パネルディスカッション
(コーディネーター)
東京大学大学院人文社会系研究科教授 小林 真理氏
(パネリスト)
合同会社 imajimu 代表取締役 今川 和佳子氏
拓殖大学商学部教授 松橋 崇史氏
静岡県沼津市長 頼重 秀一氏
京都府綾部市長 山崎 善也氏
11:50 閉会式

[10月12日]

開会式（9：30）

9時30分より開会式が行われました。まず、全国市長会会長の立谷秀清福島県相馬市長の開会挨拶があり、その後、開催市である熊谷雄一八戸市長の歓迎の挨拶、そして、来賓として、青森県知事（ビデオメッセージ）の祝辞がありました。

基調講演（9：50）

開会式終了後、東京藝術大学長・アーティストの日比野克彦氏による基調講演がありました。講演のテーマは、「アート役割って何だろう？」で日比野氏が今まで携わってきたアートについて自治体とコラボしての取組みを発表されました。それらは、ご当地青森県八戸市の八戸市立美術館での取組みをはじめ、岐阜県岐阜市、茨城県水戸市、香川県三豊市など国内においての事例を紹介されました。それらに加えて海外での取組みとして、イギリスのマンチェスター市でも携わってこられたことも仰っていました。これらの話を聞いてアートの持つ多様性のある社会を築く基盤となる大きな力を感じました。アートは社会的な課題に対して持続的に取り組み続けていくことに対しては、とても大切なツールであることを改めて感じました。アートは人の心を動かす力があるもので、これからの行政にとってうまく活用していけば、素晴らしい成果をもたらすことができるものであることを特に思いました。

主報告（11：00）

八戸市の文化スポーツによるまちづくり 青森県八戸市長 熊谷雄一氏

八戸市は、太平洋を臨む北東岸に位置し、面積は約305キロ平方メートル、人口約22万人の中核市である。全国有数の水産都市として、また東北有数の工業都市、国際物流拠点都市として着実な発展を遂げてきています。



現在、本市では「はちのへ文化のまちづくりプラン 八戸市スポーツ推進計画」や「八戸市文化芸術推進計画」を定めていますが、これらの計画策定と前後しながら、当市が近年取り組んできた、文化・スポーツによるまちづくりの背景と取組みを紹介していただきました。特に2011年、新たな交流と創造の拠点として開館した八戸ポータルミュージアムはっち（以下、はっち）は、地域資源の魅力を創出・発信し、文化・芸術・

産業・観光・市民活動・子育て支援といった各施策を一体にした施設としてオープンしました。このはっちに行かなければ得られないもの、出会えない人やコトが集まる場を、市民が観客としてではなく、当事者として自らも参加したり創出したりできる形で作ることが、はっち運営のキーコンセプトとなっています。

文化、スポーツは社会的価値や経済的価値を有すると言えますが、このうち経済的価値では、スポーツの合宿や大会等の誘致、文化と観光施策の連携など、外からの誘客による経済効果をまず考えることができる。これら経済的価値の側面が自治体経営にとって重要である事は論を待ちませんが、ここでは社会的価値の側面に焦点を絞りながら、都市経営における文化スポーツの持つ力について考えていくことが必要と思いました。

昼食

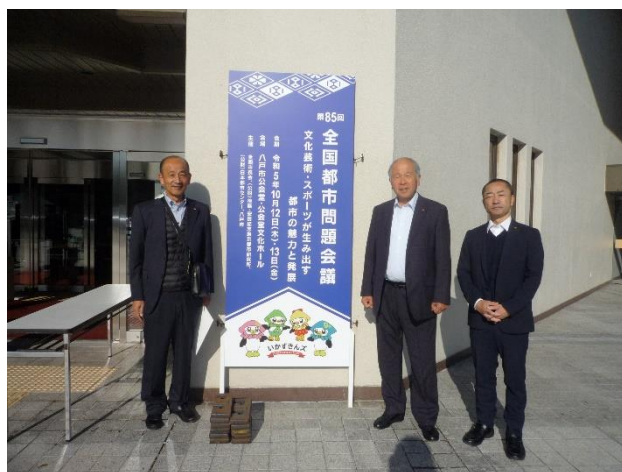
一般報告（13：10）

まちづくりの活力は地域に根ざした文化政策から育まれる

文化事業ディレクター・演出家 吉川由美氏

八戸市は中心街再生の起爆剤とすべく、「八戸ポータルミュージアムはっち」を2011年2月に開館させています。

街を再生する市民力をブーストするには、市民が自分事として参加できる、分野を横断し



壁を揺さぶるようなアートプロジェクトが必要だと考え、吉川氏は地域に根ざしたテーマを探し、アーティストのみなさん、市職員、コーディネーター達とのプロジェクトを進めました。アーティストたちは、はっちの最上階のレジデンスに滞在しながら、リサーチと制作を行っています。

八戸駅では、八戸三社大祭が真夏の4日間にわたり開催されます。毎年27

の山車組が、新たなテーマで巨大な山車を作ります。仕事が終わると各山車小屋に老若男女が集い、夜半まで山車作りに専念します。子供たちのお囃子の稽古も地域の人々が担い、山車組の運営を賄うためのご祝儀も地域の家々やお店などに門付けして集めて回ります。

山車組は祭りを支える見えざる人々の存在は大きく、差し入れを持ち寄る人々、子どもを送迎する親たち、炊き出しや着付けを担う人たち、山車組小屋の土地を提供している人、門つけにご祝儀をはずむ人たち、まつり期間中社員の休暇を許してくれる経営者たちなど。しかし、その見えざる力があまりにも評価されていないことに、吉川氏は危機感を覚えたとのことでした。

祭りは地域経済を浮揚しうる観光産業の優良コンテンツでもあります。その商品としての祭りを支えているのは、多くの場合、市民のボランティアな力だと言うことを決して忘れてはいけなかったと感じました。さらに、人々が疲弊することなく、祭りは芸能に参加する喜びと意義を感じ続けることが、その継承につながります。支えている市民力の価値を可視化する必要があり、「地域の分母としての文化」の価値を行政も市民も意識すべきだろうと感じました。

休憩

一般報告（14：30）

標高差 1,500m の地勢を活かしたスポーツ・ツーリズムの創出

長野県東御市長 花岡利夫氏

長野県東御市は、平成 16（2004 年）に東部町と北御牧村の 2 町村が合併して誕生した市です。長野県の東部に位置し人口約 3 万人の小さな市です。

本市では標高差を活かせるものに「高地トレーニング」があり、この高地トレーニングエリアを中心とした「スポーツが生み出す都市の魅力と発展」に向けた取り組みを紹介して頂きました。

当初、高地トレーニング用屋内プールの建設費は、補助金と寄付金等で賄うことを予定していましたが、補助対象にならず、寄付金も十分に集まらず、さらに早期の施設完成を目指す中で、その 1 部を地方債で賄うことになりました。地方債の償還にあたっては、企業をはじめ個人など多くの皆様からご支援をいただくとともに、施設の運営費も当初想定の半分程度に抑えられたことなどから、償還の財源となる基金も順調に積み上がり、初期の目的の通り、償還は終わっています。平成 29 年 11 月に国内最高地点の全天候型 400m トラックが完成し、令和元年 10 月には高地トレーニングができる国内唯一の屋内プール「GMO アスリーツパーク湯の丸屋内プール」が完成しました。素晴らしいことに令和 3 年夏の東京 2020 オリンピックでは、競泳日本が獲得した金メダルは大橋悠依選手の 2 つ。

当時の日本代表とコーチだった平井伯昌氏からは「東御の施設があったから大橋の金メダルがあった」との言葉をいただいております。

やはり地域の欠点をそのまま欠点として捉えず、個性として認識し、資源として活用した事は、非常に勉強になり今後貝塚市においてもまちづくりの参考にさせていただきたいと思いました。

一般報告（15：30）

続いての一般報告は、(株)鹿島アントラーズ FC 取締役副社長の鈴木秀樹氏でした。鈴木氏は、スポーツの持つ可能性を全面的に発揮して鹿島アントラーズと地域との深いつながりを築きあげてきたそうです。アントラーズが本拠地を置く地域はかつて、のどかな農漁

村であったが、高度成長期の1960年代にはじまった、鹿島臨海工業地帯の開発で一気に地域が発展しました。しかし、近隣に娯楽施設がなく、若者の首都圏流出が社会問題になり、加えて新住民と旧住民の間にも溝ができ、その溝を融和させるかどうかという課題も生まれたそうです。その時にJリーグ創設の構想が目にとまり、プロリーグ検討委員会の川淵三郎委員長に99.9999%不可能といわれながらも、日本リーグの住友金属工業蹴球団をプロ化し、日本初の屋根付きサッカー専用スタジアムを急ピッチで建設し、1993年のJリーグ参画を果たした。それ以来、自治体、民間企業、アントラーズが一体となって地域の活性化、地域振興に進めてきたそうです。それから徐々にホームタウンとして近隣自治体が平成の大合併と相まって現在は、鹿嶋市、潮来市、神栖市、行方市、銚田市の五市で構成されている。この五市が出資団体であることが特徴で、五市はクラブ運営の責任を担っている。その後アントラーズは、好成績を残しながら全国的にも有名クラブとなって行き、クラブ運営以外の関連した事業を立ち上げて行きました。その事業は、地元地域でのサッカー教室やサイン会の開催などの社会貢献から、グッズ販売からスポーツジムやフィットネス事業など多岐にわたって事業展開をされてきたそうです。これからは、医療関連事業も視野に入れた計画を持たれていると言われていました。それには、現在のスタジアムは、鹿島アントラーズが指定管理者として運営していますがその指定管理料をゼロにする代わりに、様々な事業展開ができるように指定管理の条件を大幅に緩和していく方向で進んでいると仰っていました。このような自治体との関係はまさにプロスポーツクラブを有効に使った自治体運営の成功例であると感じました。このような例をもとに、日本には、サッカーの他に、野球、バスケット、卓球などプロスポーツクラブが増えてきておりその自治体は、スポーツを貴重な資源として、効果的に自治体運営を展開されて行くことを提唱されていました。貝塚市においても、日本生命の野球部と女子卓球部との関係を今まで以上に構築していければと感じました。

【10月13日】

パネルディスカッション

【テーマ】 文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展

【コーディネーター】

東京大学大学院人文社会系研究科教授 小林真理氏

自治体文化行政から魅力的なまちへ

文化関連の領域は、一言で文化のまちづくりといっても多様な展開領域を有している。1970年代後半から取り組まれた地方自治体の文化行政も、50年を経て一つ一つ課題を解決しながら、都市の魅力のコアとして展開するための足がかりをつかんだように見えると指摘がありました。

【パネリスト】

合同会社 imajimu 代表取締役 今川和佳子氏

八戸の独自性が生み出してきたもの

ここ 10 数年で複数の文化・スポーツ施設が整備された八戸。今後いかにして地域に根付く文化と、市民のポジティブなエネルギーや想像力を引き出し続けることができるのか。その次のステージのスタートラインに、今まさに立っているように思うと言われていた。

拓殖大学商学部教授 松橋宗史氏

地域活性化におけるスポーツの役割とその変化

地域活性化に親和性のあるスポーツの特徴として、「全力」を可視化すること、多様性を体現することに焦点を当て紹介していただいた。変化するスポーツの特徴を捉えること、もしくは、スポーツに新たな価値を付与することを通じて、スポーツを地域活性に生かしていく視点が重要になるとの事でした。

静岡県沼津市長 頼重秀一氏

スポーツとアニメを活用した賑わいの創出

本市はスポーツ・アニメを通じ、地域資源の掘り起こしや沼津の魅力発信に取り組んでおりましたが、その結果多くの方々に沼津にお越しいただき、その皆さんと市民の交流の輪が広がるとともに、新たな市民や企業間の交流が生まれ、多くのビジネスチャンスも創出されておられます。今後はスポーツ・アニメを通じた取組みを加速させ、まちが活気と魅力に溢れ、市民一人一人が街に誇りを持ち、いつまでも輝き続けるまちとして、次の 100 年への新たな一歩を力強く踏み出していくと言われていました。

京都府綾部市長 山崎善也氏

文化芸術・スポーツで紡ぐ街・綾部

住民自身がそれぞれの地域に誇りを持たない限り、定住や交流の促進は覚束なく、その土地を訪ねてきた人に対して住民が自信を持って自分たちのまちの素晴らしさ（幸）を語ることから、地方創生は始まると思います。これらのパネルディスカッションを通じて文化芸術やスポーツの魅力や価値を最大限活用することは、まさにそれを実現できる「鍵」になると感じました。

以上、第 8 5 回全国都市問題会議の報告と致します。